

ソメシュ・クマール 著 田中治彦 監訳
丸谷士都子・奈良崎文乃・上條直美・湯本浩之 訳
(特活)開発教育協会 企画協力
『参加型開発による地域づくりの方法
—PRA 実践ハンドブック—』

明石書店 2008年8月 A5判 402頁 ¥3990(税込)

上條直美

国際開発協力の分野において、1980年代半ば以降強く提唱されてきた参加型開発は、社会変容に寄与できるアプローチとしてその存在価値を高めてきた。一方で、1990年代後半以降、国家主導のプロジェクトや国際機関による開発計画においても当事者の参加による開発が重視されるようになり、参加型を標榜しつつも現実には当事者のイニシアティブが不足しているなど、参加型開発の理念をどう解釈するかについての再検討が求められるようになった。参加型開発の意味する「参加」が「誰の参加か」「何のための参加か」「何への参加か」ということを再評価することによって、社会変容を目的とした参加とそれによる開発を実現するアプローチとしての参加型開発を確立していく必要が高まってきた。

参加型開発は、短期間に成果が求められる開発介入、すなわちドナーあるいは実施側主体のプロジェクト中心の開発へのオルタナティブなアプローチとして試行錯誤されてきた。最も弱い立場の人の参加やすべての住民の意思決定への参加を促すことを目的とするため、外部者は「ファシリテーター」として、あくまで脇役としてのかかわりに徹することが求められている。しかしそれは外部者の役割が過小評価されるということではない。むしろファシリテーターとしてどのように当事者にかかわるかということがこれまで以上に問われてくるのである。

それまでの質問紙による調査法に代わり、1970年代後半から活用されてきたRRA(簡易農村調査法)は、当事者による地図や図表の作成や分析、計画立案の手法であり、PRA(参加型農村調査法)やPLA(参加型学習行動法)として進化していくプロセスで概念が深化し、それに伴い多様な手

法も編み出されてきた。とくにPRAでは当事者と外部者の関係性をより重視している。

本書はインドの開発ワーカーであるソメシュ・クマール氏によって書かれた“Methods for Community Participation: A Complete Guide for Practitioners”(2002)の翻訳であり、PRAの概念とその起源、原則そして応用について整理され、31種類ものPRA手法を「空間に関するPRA」「時間に関するPRA」「関係性を扱うPRA」に分類し詳しく説明している。外部者が当事者にどのようにかかわるか、という問いへの答えが、一見すると手法というノウハウを教える形で提示されているように誤解されるかもしれないが、本書はいわゆるマニュアル本では決してない。PRAの手法を学ぶことが、よいファシリテーターになることではない。スキルだけを以てコミュニティに入ることは、むしろ当事者のエンパワーメントを損なうことにもつながりかねない。クマール氏の10年以上にわたるPRAの実践経験に基づく本書は、氏の経験からの実例や実用のための素材と使い方が記されているが、読者に「創作の余地」を多分に残し、参加型開発を実践する立場にある人びと自身が現場において経験を通して独自のやり方を創作することを奨励している。

こうした開発途上国における参加型開発のアプローチの理念と方法は、同時に日本における地元の学的方法論やまちづくりの手法とも重なり合うところが大きい。PRAの場合には社会的排除が根づく社会構造に取り組むという明確な目的と理念をもっており、日本における地域開発、地域づくりにPRAを応用する場合、その目的、理念をどのように日本の社会状況に当てはめて考えることができるかが課題ではないだろうか。開発教育が途上国の開発問題と先進国の責任という構造的な理解を促すための学習活動に取り組むなかで、近年日本の地域開発、地域課題に取り組む視点を育んできたのも、途上国における参加型による社会づくりが、自分たちの社会にこそ必要だということに気づいたからであろう。そのような意味においても本書は私たち日本の社会を映し出す鏡の役割を果たしうる貴重な書であるといえる。